

大事故とは何か — 当事者にとって、
企業にとって、メディアにとって
Large-scale Accidents as they relate to the People,
Firms, and Media Concerned

井上能行

東京新聞編集局

Yoshiyuki INOUE

The Tokyo Shinbun, editorial board

【Key words】

1. 大ニュース (headlines)
2. 耐震強度偽造事件 (scandals of falsified quake-resistance data)
3. アスベスト問題 (asbestos issues)
4. フェロシルト問題 (Ferrosilt issues)
5. ディーゼル車の排ガス規制 (diesel-vehicle emission control)

【概要】

日本では「技術者に悪い人はいない」というイメージがある。たとえば、耐震偽装事件でもっとも責任があるはずの姉齒建築士への非難の声はそれほど大きくはない。一方、技術が絡んだ事件や事故では、社長が記者会見して頭を下げるだけで、技術者がきちんと説明することは少ない。技術者が自ら、わかりやすい言葉で説明をすることも社会的な責任だと考える。

講演を引き受けたときに、大学院生の方が何十人かいらっしやると聞きました。若い人が新聞を読んでくれないということが、新聞社にとって今一番の悩みです。大学院の方ですから、読んでくれているのではないかと期待しますが、今、ここで中日新聞を読んでいる人、手を挙げてくださいと質問するほどの勇気がないのでしません。(笑)

本題に入る前に新聞の話を見せてください。新聞の悪口の中で、特に若い人の中で言われるのが、新聞はどこを読んでも同じということと、ニュース

はインターネットで読めばわかるから新聞を買って読まなくてもいいというのがあります。

新聞とは

どの新聞も同じか、試しに鶴舞の駅で今日の朝刊を買ってきました。

最初に中日新聞を出さないといけないですね、自分の会社ですから（笑）。これが中日新聞の今日の朝刊です。一面のトップは一酸化炭素中毒で、松下電器が5万円で温風器を回収するという記事です。人の命にかかわる事だからと考えて一面トップにしたのだと思います。

朝日新聞はイラクの陸上自衛隊はイギリスやオーストラリアの軍隊が引き上げれば撤退しますよという記事です。いつ撤退するかという時期についての話。毎日新聞は、耐震偽装問題で耐震性に問題があるマンションに住んでいる人は、公営住宅に入れてあげますということになっているけど、実際の応募は22件しかないという話。読売新聞は、トヨタの世界生産が890万台になると書いています。最近よく話題になっている、「トヨタが世界一になるかどうか」ということでトップに選んだようです。

4つの新聞はみんな一面トップの記事が違ってきます。

ちなみに私の自宅に来た東京新聞は、悪質リース問題です。今、東京で話題になっているテーマの記事です。もう何十年も前に中日新聞は東京新聞を買収しました。東京では東京新聞の名前で新聞を発行しています。私は普段、東京にいるので、東京新聞と言いますが、会社は中日新聞社です。東京新聞と中日新聞は、記事は共通ですが、一面トップの記事は違うことが珍しくありません。

どこの新聞も同じどころか、どの新聞も違っていた、というのが今日の朝刊です。何も今日の朝刊は、各紙の一面のトップ記事がバラバラだから買って来たんじゃないんです。全部一緒だったら、これは大ニュースなんですと言おうと思っていました。

実は今日は大きいニュースがなかったんです。大きいニュースがなくても一面トップという場所はあるものですから、一番大事な記事は何か、一番読まれる記事は何か、と考えて作って見たら、みんな違う記事になったという

ことです。

新聞の読み方

次はインターネットのニュースです。

皆さんも結構見ると思うのですが、その時、どのニュースが一番大事なニュースと思って見られていますか？一番上の記事と思われるでしょうが、残念な事にニュースを出す側には、新しいニュースを重視する習慣があるんです。少し重要度は低いけど新しいニュースが入ってくると、重要な記事よりも上に出すことがよくあります。どのニュースサイトも記事のランク付けはしていないので、情報提供側がどのニュースを一番大きいニュースと判断したかが分からないのです。

新聞はそういう点、一日一回か、夕刊を入れて二回。どこかで区切りをつけて、このニュースは大事ですよ、というのを示していますので、何が大事なニュースなのかという事が分かりやすくなっています。

何が大事なニュースかなんて、見りゃ分かるよ！と思われるかもしれませんが、意外と難しいことなんです。私は記者といっても、記事を書くだけの仕事しかやったことがないのですが、新聞社の中では、記者の仕事は3つあります。記事を書く記者と、記事の重要度を判断し、レイアウトを決めて見出しを付ける整理記者、それから文章や見出しに間違いがないか調べる校閲記者という職種があるのです。最近、同じ一級建築士にも設計や構造計算といった仕事があると言われるのと同じです。そういう専門家を育てて配置するほど、実はニュース価値の判断は難しいのです。

新聞の一面をコピーした資料がお手元にあると思います。1面が4つ並んでいるコピーです。

コピーの右上に「小泉自民地滑り大勝」という見出しがあると思います。これをメイン見出しと呼んでいます。「小泉自民地滑り大勝」という見出しの文字は、新聞のページの左の端から右の端にある「中日新聞」というカット、これを特に題字と呼びますが、そこまでドーンと突き抜けています。見出しの上下の大きさは、記事の一段分です。見出しが端から端までであるというのが、新聞が大きいニュースを伝えるときの手法なんです。戦争が始まった、

というときには、この見出しの上下の幅が二倍にも三倍にもなるのでしょうか、そういう時を除くと大体一段です。

その隣に「フェロシルトに産廃廃液」という記事がトップの紙面があります。比べると分かりますように、見出しは横向きになっていますが、左側は紙面の端まではいっていません。途中で止まっています。これは並みの大きなニュースです。

右下に「[一太郎]が逆転勝訴」というのがあります。これには横向きの見出しがありませんね。縦の見出しだけになっています。それほど大きいニュースでない時は、横向きの見出し、横凸版と呼んでいます。これがありません。今は新聞製作はコンピューター化され、凸版は使っていないんですけど、「凸版見出し」という言葉は残っています。

今日の新聞を改めてみますと、これは毎日新聞ですが、横の見出しを取っていませんね。朝日新聞も、中日新聞も、東京新聞も、読売新聞も取っていません。つまり、どこも今日は大ニュースがなかったと考えていたという事が、この見出しを見ると分かるわけです。

まとめますと、今日は大ニュースがないから、各新聞の1面トップの記事が違い、横向きの見出しも取っていないという事がわかります。

コピーの左下に「あれ？売れてる万博ガイド本」という記事があります。これは今説明したパターンから外れている記事です。時々、新聞の一面にこういう囲み記事が載ります。わかりやすいように、私が記事の出ているスペースの周りに少し太い線を引いています。四角い箱状に記事が組まれているのが分かると思います。

これは、ニュースではないけど面白い話題でしょ、という記事です。レイアウトを変える、つまり、箱型に組むことで、普段のニュースとはちょっと違ってるとですよという事を伝えようとしているのです。

私自身は会社に入ってしばらくは、こうした新聞の約束事を知らなかったのです。整理記者と話して気づいたり、教えてもらったりして、「新聞ってそうやって作っているんだ」とわかったことなのです。おそらく、皆さんもこれまで、そうしたことを意識して読まれていなかっただろうと思います。話させてもらいました。

新聞の読み方のコツを、もう一つ紹介します。

記事には大雑把に分けて、過去形で書いてある記事と未来形で書いてある記事があります。意識されて読まれていないと思いますけれど、「～があった」という記事は過去形ですから、すでに起きたことです。事実と思って間違いがないですよ。ところが「トヨタが世界生産890万台へ」というのは来年の見通しですから、実現するかどうかは分からないのです。

新聞の記事には、事実と予想が混在しているのです。もちろん、予測記事はそれなりの根拠があって書かれていますが、予想ですから実際には外れるものもあるんです。書き手の記者は予測記事だと意識して書いていますし、見出しも「～へ」という風に「へ」をつけて、未来を意味しているつもりなんです。新聞はそんな事を考えた上で出されているのだという事を知っていただいたうえで、新聞記者からみた技術者の倫理という話に入りたいと思います。

耐震偽装問題

今日の話をお願いされた後に、耐震偽装問題が明らかになりました。この話を最初にとったのですが、困ったことに、未だに担当の記者は寝る間もない忙しさなのです。健康を崩している記者もいます。それで裏話を聞く時間がありませんでした。

それでも新聞を見ていると、書いている方は意識しているけれど、読者にはあまり気づかれていないだろうということがありますので、最初に耐震偽装問題の話をしてします。

東京新聞の1面のコピーが2枚あります。ちょっと見ると同じように見えますが、「重電メーカー3社捜索」というのが縦の見出しで入っているのが、いわゆる新聞の早版、締切時間が早い新聞です。耐震強度偽装の記事は、左側です。早版では、トップ記事は「重電メーカー3社捜索」という成田空港の談合事件です。二番手の記事は大体、トップ記事の左側に配置されます。この時点では、耐震偽装事件が二番目だったのです。そのあとの締切時間の新聞から、一面のトップは耐震偽装に切り替わるのです。談合が二番目です。

耐震偽装に関する国土交通省の記者会見は夕方に行われました。内容を把握して、記事になって出てくるまでには時間がかかります。こういう問題で

すから、記者会見だけでは重要性の判断も難しいところがあります。

私はこの日、編集局にいたのですが、談合事件は夕刊のときからトップ記事でした。早版というのは、夕刊の出ていない地域向けですから、談合事件がトップで新聞づくりが進んでいました。そこに耐震偽装に関する記者会見に出ていた記者から連絡が入ったのです。記事はまだ来ていませんでしたが、話の内容から1面に出すことはすぐに決まりました。記事が届いて、マンションの耐震偽装というのは、あってはならないことですから一面トップの記事が入れ替えられたわけです。

これが新聞の表面の話です。

面白いのは談合事件も耐震偽装も、どちらも担当の役所は国土交通省だということです。空港公団の談合は当然、国土交通省にとって都合の悪い話です。自分のところのスキャンダルですから、マンションの耐震偽装の話を発表すれば、新聞社は当然、飛びつくわけです。

大ニュースが出れば、大ニュースに潰されるニュースもあるのです。国土交通省がこの日を狙って記者会見をしたかどうかは分かりません。私は社内で「狙ったんじゃないのか」と言ったんですが、「お前、性格が悪いな」と言われました。というのも、記者会見は事務次官という役人の中でトップの人がやったんです。これは異例なこととして、国土交通省がいかに耐震偽装を重大視していたかを示していたからです。

ところが、その後、どういう経緯で国土交通省がこの話を知ったのかということが明らかになりました。大臣には一週間以上も報告が上がっていなかったそうです。急にわかった話ではなかったのです。その後、中日新聞だけでなく、どのマスコミも連日のようにマンションの耐震偽装問題を報道する一方で、成田空港談合事件の記事は非常に小さくなっています。狙ったかどうかは別にして、国土交通省にしてみると、空港公団の談合事件のニュースを潰すことに成功したといえそうです。

何で私が疑ったかと言いますと、実は最近多いんですよ。

例えば、2004年に民主党の代表に岡田克也さんが決まるという日に、小泉首相は英国留学時代には年金未加入だった可能性があることを認めたり、北朝鮮による拉致被害者家族が帰国できそうだという話が出たりしました。

警視庁の警察官がとんでもない不祥事を起こしたことが分かり、幹部が

「すみません」と頭を下げている日に、大きな事件の発表をするといったこともあります。

皆さんが大学を出た後に、企業の不祥事を発表する時にはオウム裁判で麻原の死刑判決が出る日にしなさいとアドバイスをしているわけじゃありませんけれど、新聞を毎日見ていると、何でこんな日に大きなニュースが重なるんだろうと思う日が出てくると思います。発表する側に大きなニュースに不祥事を隠そうという意図があるのかもしれないと疑いたくなるくらい、今の日本には倫理的にいかがと思われるような人たちが、それなりの地位についているような気がします。困ったことに、テレビや新聞社もそのままをして、自社のマイナスのニュースを大きいニュースがある時にぶつけて発表するようになっています。

話が少しそれてしまいましたが、最初に耐震偽装問題が明らかになったときのニュースをテレビで見られた方はいらっしゃいますか？姉葉さんという偽装した建築士は、マスコミの取材にちゃんと答えているんですよ。「私、やりました」とか「2年前からやりました」とか「何件ぐらいあります」とか、ポソポソッと喋っているんです。悪びれたところがないので、ニュースを見た人は、何も反省していないと感じたといえます。

姉葉さんは何であんまり反省しているような様子がないのか。未だに疑問を持たれています。私は、最終的には彼も被害者だったという風に決着するだろうと思っています。

日本というのは非常に技術者に優しい国です。この道一筋。昔の誠実な職人さんのイメージが技術者に引き継がれています。技術者はいい人、悪いことをしない人、清貧に甘んじて世の中のために尽くす人、というイメージがありまして、あまり非難されることがないんです。姉葉さんの場合も、自宅の映像を見られた方は分かると思いますが、ちっとも豪邸ではないんです。悪事を働いて金をもうけたのなら、あんな貧しい家に住んでいるはずがないと思ってしまうような家です。それどころか、割れた窓ガラスにガムテープかなんか貼ってあるのを見ると「ちょっとかわいそう」と思ってしまうぐらいです。彼はきっとあまり非難されず、彼に偽装するように注文した方が悪いという話になっていくだろうと思うんです。

私は理系なもんですから、技術者だったら偽装を頼まれたって、ちゃんと

やってくれよ、と言いたいのですが、マスメディアの中ではあまり非難されずに終わっていくと思います。

最近、北川国交相はなんで被害者救済に熱心なのか、とか言われていますけれど、国交省にしてみると自分のところの不祥事から目がそれ、しかも、偽装問題では役所の責任は問われていませんので、きっと今後も、大臣も役所もかなり被害救済には熱心だろうなと思います。

アスベスト問題

次の問題にいきます。アスベスト問題というのがあります。アスベストはずいぶん前から問題になっているんです。20年近く前、科学部の同僚記者が一生懸命アスベスト問題を追いかけていて、記事を何本も書いていました。その頃、学校の校舎に使われていたアスベストが問題になっていたのです。学校のアスベスト問題が一段落して、アスベスト問題は収まったと、私も同僚も思っていました。

次にアスベストが話題になったのは阪神大震災の時です。震災で色々な構造物が壊れました。壊れたことや、壊れた建築物などの撤去作業で、アスベストが大量に飛散したらどうするんだという問題意識だったのです。しかし、大震災の被害があまりにも大きかったので、アスベストがとかダイオキシンとか言ってもしょうがないだろうという感じで、結局、私も同僚も取材はしたんですが、あまり大きな記事にはなりません。

それからまた10年です。マスコミが忘れていたのか、世の中が忘れていたのか、役所が忘れていたのか分かりませんが、もう終わった話題だと思っていたアスベストが再び、現れたというのが実感です。

今回は、尼崎にあるクボタの工場で使っていたアスベストが原因で、工場で働いていた人だけではなく、近所に住んでいた人までが亡くなっていることが明らかになりました。「石綿死10年で51人」というちょっとした記事のコピーを配っています。欄外のところに、毎日新聞夕刊と書いてあります。6月29日の夕刊です。この目立たない記事が今年一番のスcoopだと私は思っています。毎日新聞の縮刷版のコピーですけれど、すごいスcoopの扱いが小さいのは残念なことです。

クボタはこの夕刊が出た後で記者会見して、実態を公表しました。被害者の人数は発表で増えました。翌日の朝刊で「クボタ 石綿で従業員ら79人死亡 近隣住民にも被害」という風に出ています。中日新聞も東京新聞も1面です。新聞社っていうのはプライドが高くって、だいたい、特ダネを抜かれると「それはたいした話じゃないんだ」みたいな顔をして、記事を小さくするのが普通ですが、この時は毎日新聞の夕刊よりも大きくして載せています。

関西の話なので、東京新聞は通信社から送られてきた記事を載せます。通信社の記事を見て、先ほど言いました整理記者が「井上さん、この話ってすごいですか?」と聞いてきたんです。私は「他にニュースなければ1面トップでいい話ですよ」とこたえたんです。「抜かれた話が1面トップはちょっと恥ずかしい」ということで、トップにはなりませんでしたが、一面で大きな見出しです。

なぜ、私が一面トップでもと返事をしたかということ、アスベスト問題は終わった話だと思っていたのに、そうではなかったからです。これはショックでした。さらに、クボタという企業は環境に優しいというか、誠実な企業だというイメージが私にはあったものですから、クボタの被害状況がこれだったら他にも絶対出てくると考えたのです。つまり、クボタが発表した後で「実はうちでもありました」と発表する企業が出てくる、クボタだけでは終わらない、と私は思ったのです。その後いくつかの企業が従業員に死者がありましたと発表しましたが、私が予想したほどは続いていません。それでも、被害が広がるはずだから重大なニュースという判断は正しかったと今も思っています。

このスクープを書いた毎日新聞の記者は、ずいぶん長いこと取材をしているんです。毎日新聞のホームページを見てもらうと、「アスベストを追う」というタイトルで、新聞の連載がそのままアップされています。それを読むと、スクープに至るまでが分かります。ずいぶん長い間、被害者の人たちと会って、話をしている中で、クボタの話が出てきたと書いてあります。いい連載ですので、帰ったら一度見てください。その連載の中で、被害者がいかに悲惨であるかという事も出てきます。

企業イメージ

ところで、私がなぜ、クボタにいい印象をもっていたのかを話します。実は学生時代、クボタが発行しているPR雑誌が、私の専門分野についての特集を出した事があります。それが教科書より出来がよかったんです。卒業研究をまとめるとき、広報誌を横に置いて書いたほどです。それが私の企業イメージにつながっています。クボタは環境関係の仕事をやっているのです。そのプラスイメージもあります。企業イメージというのは、こういうトラブルが起きたときに、相手にどう受け取られるかということを左右する重要な要素だと思うのです。

その後、「さすがクボタだ」と思ったのは、テレビのニュースを見ていたら、被害者が「クボタだから従業員だけじゃなく、住民にも補償をしてくれた。しかし、ここから先は国にお願いしたい」というような事を喋っていたのです。クボタのせいで癌になったのに、その患者自身が「クボタは一生懸命やってくれている」と話しているのです。こんなPR効果がある言葉はないですよ。

クボタは住民から苦情が来て慌てて調べているんです。そのときにきちんと対応して公表している。きちんとやっているのです。何十人もの被害者が出ているのに、これからもっと数が増えてくると思うのですけれど、それでも、あまりひどく批判されていない。企業としての危機に際して、クボタは非常にうまくやった。誠実にやったのが、結果としてうまくいった、と言うべきなのかもしれません。ただ、その後、東北地方でクボタが指示をしてダイオキシンのデータが偽造されたという記事が出ていたので、個人的にはクボタを買いかぶりすぎたかあと思っています。

フェロシルト問題

これは私よりも名古屋に住んでいる皆さんの方がよく知っておられるのではないかと思います。こちらでは大ニュースという印象があると思いますが、実は東京では、どこの新聞社もほとんど報じていませんでした。名古屋ではおそらく夏ごろにはもう、よく知られていたと思うのですけど、東京で最初

にまとまった記事が出たのは朝日新聞で、10月23日です。朝日新聞の記事が出る少し前に、東京新聞の方でもやろうという話をしていて、10月末までには記事が出ました。つまり、今年の秋まで首都圏の人はほとんど誰も知らなかったのです。行政が石原産業を告発するというので、その後、少しは報じられるようにはなったんですが、元々、どうして問題になったのかという経緯が知られていないので、首都圏では関心が薄い話になっています。このように、ニュースは地域性も持っています。

ところで、私くらいになると「石原産業って昔もやったよなあ」と思い出すほど、公害企業というイメージがあります。クボタとまったく逆の先入観です。

企業の対応

皆さんに配った資料は、石原産業の広報資料のコピーです。誠実なのか間が抜けているのかは分かりませんが、石原産業の発表資料は、ホームページで読むことができます。フェロシルト問題に関しては、今年の6月9日に最初のプレスリリースが出ています。「平成17年6月9日付当社製品フェロシルトについてのお知らせ」と書いてある文書です。

「当社製品フェロシルトは酸化チタンの副産品で、埋め戻し材として販売してまいりました。今般、岐阜県より、フェロシルトを使用した地域から土壌環境基準を上回る重金属等が検出されたとの計量結果が公表されました。当社は、この結果を受け、製造メーカーとして施工地域での不安を取り除くよう、使用された地域での安全確認を行い、関係当局各位のご指導を仰ぎ、地権者とも協議の上、自主回収を含めて必要な措置をとることといたします。なお、フェロシルトの販売はすでに中止しております。5月13日に発表いたしました当期業績への影響額につきましては、具体的な措置が固まった段階で開示の予定です。取引先、株主の皆様をはじめ関係者各位にご心配とご迷惑をお掛けしておりますことを心よりお詫び申し上げます。」という文章なんです。

岐阜県から苦情が来てまして、それには今、対応していますが、株主、それから取引先の皆様はそんなに心配されなくてもいいですよ、という事を伝

えたいような文章です。

7月29日のプレスリリースは、もう少し具体的になっているのですが、気になったところにアンダーラインを引きました。引いたところは「フェロシルトは、当社の工夫と技術開発力によって生み出された、循環型社会の形成を目的とする国の環境基本方針の趣旨に適合した商品であります」と書かれています。最近の報道とは全然違いますよね。この時点まで石原産業の上のほうの人たちはみんな実態を知らなかったのか、それとも隠しおおせると思っていたのかは分かりません。それでも、この文章がこうやって残っていると、石原産業というのは騙せるものだったら世の中を騙してやろうと考えて発表文を出したという風に受け取られます。

その次は、自主回収費用の総額は概算100億円で、当期純利益が約80億円が減少する、と書いてあります。最後にはまた「取引先、株主の皆さん」となっています。フェロシルトの埋め立てで影響をこうむった人から見ると「石原産業はどこを向いて話をしているのだ」とか「あんなものを売っておいて、しらばっくれるなよ」と言いたくなるような文章です。このように、企業の対応によって受ける印象はずいぶん違ってきます。

たとえば、最初に「このような事になって誠に申し訳ありませんでした」と社長が頭を下げちゃえば、今のような事態になったかどうかは分からないと思うのです。ちなみに10月19日、11月9日、11月21日と立て続けに文章を出しているのですが、最後の11月21日の最後の所を見ますと「地権者及び地域住民の皆様をはじめお取引先、株主のご関係者の方々には、ご不安とご迷惑をお掛けし、心よりお詫び申し上げます。」となっています。ここでやっと、株主の前に地権者と地域住民が出てきて、反省したことが分かるんです。

技術者の倫理というテーマからはちょっと離れましたけれど、技術的なトラブルが起きたとき、企業はどう対応すればいいのか、というのが少しはわかってもらえるのではないかと思い、取り上げました。

技術者が説明を

ところで、クボタや石原産業の場合は、耐震強度偽装問題のときと決定的に違うところがあります。それは、耐震偽装では、姉業さんだけでなく、偽

装を見つけて告発した設計事務所の社長ら、技術者がマスコミの前に出てきて説明しています。一方、クボタや石原産業の時には技術者の人はまったく、出てきません。さっき、社長が頭を下げろ、と言いましたが、最もよくわかっているはずの、担当の技術者は表に出てこないのです。

技術が分かっていない経営トップや、状況がよく分からない広報担当が出てきて話したため、混乱に拍車をかける、というのは珍しくありません。なぜ技術者が表に出てこないのかは分かりませんが、分かっていない人が説明すると誤解を広げる事もありますし、隠そうとしていると疑われることもあります。何か起きたら、技術者がきちんと説明する事が必要ではないかと思っております。

付け加えますと、技術者ってあまり嘘をつけないんです。取材する側からは、非常にありがたいことです。話がそれますが、以前、動力炉・核燃料開発事業団、動燃と略しますが、そこで立て続けにトラブルを起した事があります。動燃というのは技術者ばかりの集団ですから、記者会見も技術者が出てきて説明をするわけです。事故は、茨城県とか福井県とかで起きるので、現地で記者会見を開き、さらに東京でも記者会見を開きます。

このとき、ちょっと面白いことが起きます。東京の新聞社には科学部があって、東京での記者会見には科学記者が行きます。原子力の専門家ではありませんが、多少は知識がありますので、結構、専門的な言葉が使われます。現地の記者会見の方は、普通の新聞記者、つまりほとんどが文系出身の記者が出ます。勉強している記者もいますが、事故の取材は初めてという記者もいます。そこで、用語の説明に随分時間を取りながら記者会見が進みます。

どちらでも担当者は正直に話しているのだと思いますが、記者会見の後、両方で聞いた話を突き合わせると、食い違うのです。食い違っているところには大体ウソがあり、ウソをつきたくなるところに真相に迫るヒントが隠れています。そこを追及していくと「実際にはマニュアルに反してバケツを使っていました」といったことが明らかになります。

技術者は自分が知っている範囲、聞いている話の範囲で、説明してくれます。打ち合わせもちゃんとやっていない時に喋ると、本人にウソをつく気はなくても事実とは違っている場合があります。また、記者会見の場では気がつかないけれど、後になって、当事者にとっては不都合なデータが、最初の

記者会見で出ていたりします。

そういうことがなくても、取材する側からすると、技術者が出てきて喋ってくれる方が、正確に取材できていいんです。技術者の方が正直ですし、ちゃんと理屈の通った話をしてくれるので、ありがたいのです。皆さんが将来マスコミに取材される事があるときには、ぜひ、正直に話をしてほしいと思います。正直に話をしてくれる人を非難する事はまずありません。正直というのが結局、一番有力な信頼を得る方法だと思います。

ディーゼル車の排ガス問題

話が少し古くなりますが、ディーゼル車の排ガス規制問題を取り上げます。

ディーゼル車の排ガスというと、黒い煙を吐いて、いかにも大気汚染の原凶みたいな感じの車を今でも見かけます。東京ではディーゼル車の排ガスを規制したらどうだという話が随分前からあります。ただ、技術的にすごく難しかったので、国はなかなかやらなかったのです。ところが、東京都が石原慎太郎知事になった時に変わったんです。石原さんの性格ですから、とにかく目立つ事がやりたい。東京で石原都政が始まってしばらくして、いくつか「お、そんな事をやるのか」というような政策が出たのです。その一つが、ディーゼル車の排ガス規制でした。東京都の環境担当の人が、非常にうまく石原知事を説得したんだろうなと私は感心しているのです。

石原知事はペットボトルに入れた排ガスのすすを振りながら「こんな空気を東京都民は吸わされているんだ。これを規制しなくてどうする」と言ったわけです。ディーゼル車の排ガスは肺がんなどの原因と疑われています。花粉症の原因の一つではないとも言われています。それで、ディーゼル車の排ガス規制を石原知事が「やる」と決めたことは、だれもがパチパチパチ、と手を叩きたくなるような話だったわけです。

しかし、ディーゼル車の排ガス規制は、技術的にすごく難しいんです。自動車メーカーはみんな反対。技術だけでなく、コストもかかりますから。当時の通商産業省、今の経済産業省も、国民ではなく自動車産業側に付きますから、当然、反対。環境庁、今は環境省になっていますが、国を差し置いて都がやるというのは面白くないのか、見ているだけ。そういう構図が初めに

あったのです。

こういう登場人物が多くて、いくつもの要素がからみあった問題というのは、新聞ではスペースの問題があって、全体像をうまく伝えるのが難しいのです。

資料として雑誌のコピーを付けました。これは私がペンネームで環境雑誌に書いた記事です。いろんな雑誌で、素性のよく分からないジャーナリストが書いた記事がありますが、結構、新聞記者がペンネームで書いた記事が含まれているんです。雑誌は新聞に比べると、スペースが広いですし、読者層も絞られているので、書きやすい面があるのです。新聞と雑誌とには、そういう住み分けもあるんです。

私のこのエッセイは、見出しを見てもらえば分かるんですけど、石原知事はあまり好きじゃないけど、ディーゼル車規制は賛成という内容です。ある新聞で、ディーゼル規制は無茶苦茶だと言う論調の記事が出たことがあったので「何をくだらん事を言ってるんだ」と書きたかったのです。東京新聞で「～新聞の記事はくだらん」とは書けませんので。雑誌という媒体は、そういう意味で非常に便利です。

脱線ばかりしてすみません。

東京都が規制を実行しようとしたときに問題になったのは、自動車メーカーがどこも、東京都の排ガス規制に対応する、改良型の排ガス除去装置というのを作らないと言ったことなんです。技術的に無理だと。それで排ガス規制の実施が危ぶまれたのです。

そのとき、三井物産ができると言って検査を受け、2002年に認定を受け、都バスなどに納入したのです。ところが2004年になって三井物産の方から「実はあのデータには偽造がありました」「合計3回データを捏造したものを東京都に出していました」という発表があったのです。排ガス除去装置のデータに偽造があったと三井物産が発表したのです。

結果オーライ？

三井物産が作った排ガス除去装置は全然役に立たないのかというと、そうではなくて、東京が指定しただけの能力はなかったと言うのです。面白いこ

とに、十分ではなかったけれど、三井物産ができますと言ったので、世の中の動きが変わって、ディーゼル車の排ガス規制が進んだんです。もう一つ、変わりました。除去装置を付ければ、それなりに排ガスは綺麗になりますし、規制に対応した新車への買い換えも進みます。それで東京都内の空気はこの数年で綺麗になっているんです。三井物産が悪いことに違いはないのですが、東京都は騙されたことに変わりはないんですが、結果として、東京都と都民にはメリットがあったんです。

実は東京都議会はデータ偽造の発表があった後、三井物産に対して文句を言ったんですが、それほど厳しく追及することはありませんでした。三井物産は少し前に鈴木宗男さんという有名な国会議員とつるんで悪いことやったというので散々追求された経験があります。排ガス装置については、自ら発表して「申し訳ありません、社内調査の経緯はこうです」と発表したのもよかったのかもしれませんが。内情を話しますと、三井物産は発表しただけじゃないんです。発表以外の事は逆に全然取材ができなかったんです。周辺取材で分かったのは、商社というのはいろんなセクションに分かれて仕事をしているので、末端が何をやっているのかなんてことまでトップが掴んでいなくても、それは普通なんだということぐらいです。それで、社長は責任を問われておりません。うまく逃げ切ったなあとも思うのですが。裁判もつい先日、まさに末端の人だけが罪に問われて終わりました。下が責任を取らされて上は無傷という、よくあるパターンです。

ところで、日本のディーゼル車の排ガス規制が進まなかった理由の一つは、日本の軽油の質が悪いからでした。日本が主に輸入するアラビア産原油には硫黄分が多いという話なのです。硫黄分の少ない原油を使っているヨーロッパは、ディーゼル車がよく使われています。ヨーロッパではディーゼルの排ガスで大気汚染が進むとは思っていないんですね。燃費はディーゼルエンジンの方がガソリンエンジンよりもよく、二酸化炭素の排出量が減るので環境に優しいと思っているぐらいです。

最近、日本の製油業界は硫黄分を除去する装置を取り付けて、軽油の硫黄分は減っています。東京都の規制もあって、国が決めた環境基準を先取りする形で改善が進んでいます。やれば出来るのです。そうしないと売れなくなるとなれば、設備を增強するのです。実際には一社だけ遅れたそうです。以

前は関係する企業がすべて実施できるのを待つのが産業政策でした。その結果、国民はいつまでも汚い空気を吸い続けることになったのです。企業を保護するための横並び政策は結局、国民に犠牲を強いることになるのです。

社会はなぜ、技術者の責任を問わないのか

そろそろ終わりの時間になったようですが、レジュメにあと2つ書いてありますので、説明させてください。

マスコミはなぜ技術者個人の責任を追及しないか。

今まで喋ってきた事で分かるかと思うんですが、世の中の人々は技術者の責任追及をそれほど望んでいない。技術者は悪い人ではないと思われている。これは皆さん方にとってはいい話だと思います。

ただ、マスコミから技術関係の人への注文もあります。工学だけでなく、医学でも農学でもそうですけど、研究をしている人はたしかにいい人が多いんですが、人の業績を的確に批評する人がいないんです。「あの研究のどこどこが悪い」とか「あの技術のどこどこが欠点だ」とかを的確に批評、批判してくれる人がいないのです。端的な例を言いますと、日本では宇宙開発のいろんな分野に人と資金を投入しています。しかし、日本の宇宙開発はこんなに手広く、たくさんのお金を掛けていいのか、という根本的な議論が最近までありませんでした。

そういうスタンスの記事を最初に出したのは、東京新聞です。私が記者に書かせたのです。私が自分で宇宙関係の記事を書いている時は「宇宙開発、明るい未来」という記事を書いていた。しかし、デスクになって、いつまでもそんな記事ばかりを書いている時代ではあるまいと考えて、費用対効果はどうなのかという記事を書かせたのです。大型プロジェクトの場合、費用対効果を考えるのは当然なのですが、そういうことをきちんとしてくれる研究者は、その当時、誰もいなかったのです。宇宙の研究者同士、お互いに相手の分野についてはあんまり批判をしない、という事でしょう。

原子力もそうなのです。何か事故があると新聞にもテレビにも桜井淳さんという人しか出てこないのです。彼は原研（旧日本原子力研究所、現在の核燃料サイクル機構）という所を辞めて、評論家になっているから、知識があ

って言いたいことが言える。他の人は原子力で給料を貰っていますから、たとえ自分のところの事故でなくても、身内の悪口になっちゃうんで言わないんです。

不思議なことにアメリカはちゃんと批判すべきところは批判する人がいて、しかも、その人達は大学教授だったり、コンサルタントだったりするんです。日本は、悪口を言う人間には仕事を与えないというのが染み付いていますので、悪口を言った瞬間に飯の食い上げになる、少なくとも当事者はそうなるかと考えるような、見えない圧力があるようです。

科学・技術の発展には科学ジャーナリズムが一定の役割を果たすと思うのですが、ジャーナリストは専門家ではないので、バックアップしてくれる専門家が重要です。それが日本にはほとんどいない。医学はもっとひどい、とだけ言っておきます(笑)。私は医学記事も随分書いたのですが、正直な話、医学取材が嫌いでした。いい先生もいるんですよ。個人的な印象で言うと、三割くらいはいい先生だと思うんです。

皆さんが将来、どういう仕事に就かれるか分かりませんが、批評精神というのか、批判精神というのか、そういうものは持っていた方がいいと思います。批判精神を持っていないと、間違っている時に歯止めがきかず、取り返しがつかないだろうと思うからです。

倫理教育への期待

次は倫理教育への期待です。耐震強度の偽装問題を語る時、特に役所の人たちが、性善説に基づいて私たちは仕事をやっていたもんだから、と言い訳をしています。チェックを厳しくしろとテレビのコメンテーターや政治家は言い出しています。しかし、チェック機関の人が性善説に基づいて仕事をしていて偽装に気づかなかったと言うのが本当なら、チェック機関なんてははじめからいらんなんです。来た書類を確かめもせず判を押しているような仕事ぶりを、性善説に基づいてという言い訳にしている。ちょっと情けないんじゃないかと個人的に思います。中身を見ていないのなら、図面を引く人がうっかりミスをして出した書類も通っちゃうじゃないんでしょうか。

でも、日本の仕組みはたいてい性善説が基盤にあると思います。性善説に

基づいてやると、安上がりなんです。例えば、構造計算書を厳密に調べるにはコストも時間もかかります。信用してノーチェックで問題がなければ、それにこしたことはないのです。社会的なコストが一番安くなるんで、理想なんです。それが最初から疑ってかからなければならぬようでは、非常にコストのかかる社会になってしまいます。

誠実であれ

ここで以前、関西大学の齊藤了文教授が講演をしたそうですけど、彼は私の学生時代からの友人でして、技術者の倫理に関わるようなニュースがあると、よく意見を聞いたり、ときには原稿を書いてもらったりしています。その齊藤教授から言われて、非常に印象に残っていることがあります。それは、普通、仕事をやるときの倫理というのは、目の前に見える、お客さんに対して誠実である事だということです。さらに会社であれば、自分の同僚に対してとか、上司に対して誠実であることだと。ところが、技術者の倫理にはちょっと違うところがある。自分が作った製品を使う人に対して誠実でなければいけないし、それが今度は廃棄物になる時にも誠実でなければいけないという。目の前にいない人に対しても誠実でなければいけないというのです。

耐震偽装問題の場合、姉葉さんにとって、偽装するということは、設計事務所とか、建築会社とかの依頼に対して誠実にこたえたことになっているのかもしれませんが。しかし、マンションを買った人に対する誠実さというか、責任感が欠如していたのです。

技術者の誠意というのは、相手がたくさんあって、だれに対して一番誠意を示さなければならないのかとなると、やっぱり社会に対する責任だろうと彼が言うのを聞いて、なるほどなあと感心したのです。意外な事に、技術以外の世界では、面と向かっている人に対して誠実であればそれで終わってしまう仕事が多いんです。ですから、技術者に必要な倫理を大学などで学んでもらえると、世の中がよくなると思います。

倫理教育というわけではないのですが、私自身が科学記者をしていて、強く感じ、よく話すことがあるのは、理学部と工学部を卒業する人には、広島の実験ドームと水俣の水俣病資料館には行ってほしいということです。科学

や技術は未来を切り開く明るいものであって、プラスのイメージが強いんです。でも、原爆は物理学者がいなくては出来ませんし、水俣の公害は工学や医学の関係者が誠実であれば、あんなにひどいことにはならなかったのです。自分達がやろうとしている仕事、やっている仕事の中には、こういう危険もあるんだと自覚をしてほしい。そのためには、科学技術が人類にもたらした悲惨なものを若いときに見るべきではないかと考えています。それはきっと、目の前にいない人にも誠実に仕事をする心につながると思います。

[文献]

- ・ 齊藤了文『テクノリテラシーとは何か』（講談社）2005年
- ・ 『科学ジャーナリズムの世界－真実に迫り、明日をひらく』日本科学技術ジャーナリスト会議（編集）2004年